周りの「目」

奈良県立青翔中学校２年　　吉井　ほのか

みなさんは、障がい者という言葉に対してどんなイメージを持っていますか。見える障がいと見えない障がい、それに対する考えは人それぞれだと思います。

私の妹は病気を持って生まれてきたことが原因で障がい児になってしまいました。そのため、生まれた時から治療やリハビリに通っています。このことがきっかけで、私は幼い頃から障がいをもった子ども達に出会う機会がたくさんありました。だから、私にとって障がい者は障がいをもっていても、いなくても何も変わらない同じ友達なのです。彼や彼女たちには、喜怒哀楽の感情があって、ゲームに負けると悔しいし、たわいない話をしているだけで楽しいし、優しくしてもらえば嬉しいし、いじめられると悲しいし、何も私と変わりません。同じ時間を生きています。一緒です。

けれども妹は、障がいのせいで辛い思いをたくさんしました。例えば、階段をゆっくり一歩ずつしか降りられない妹は、同級生に「はよ行けよ」ときつく言われ、家に帰ってから泣いていました。心ない周囲の「目」や言葉に何度悲しんだかわかりません。

このように障がいに対する冷たい仕打ちはなぜ行われるのでしょうか。見た目が違うからでしょうか。できて当たり前のことができないからでしょうか。私は、ほとんどが無理解からくる周囲の偏見だと思います。誰だって得意、不得意が必ずあります。できることとできないこともあります。それを、みんなそれぞれ、色んなことを助け合って生きているのです。たった一人で生きている訳ではないのです。それを忘れてはいないでしょうか。ただ、障がいをもっている人は、より多くの手助けが必要なのだということだと私は思います。

私の見ている世界はみんなと違うんだと気付いたのは中学生になってからでした。一生懸命良い成績が取れるように努力をしても成果が出せない。特に英語は苦手でした。何をどうすればよいのか分からなくて、障がい児を支援する先生に相談したところ、視機能検査に行くことを勧められました。そこで、言われるがままに検査に行き、出た結果は視機能異常。ディスレクシアと光感受性障がいでした。白い紙に書いてある黒い文字が眩しく感じたり、文字が動いて見えたり、墨汁でにじませたように見えたり、取り出したい情報と不要な情報の弁別が困難だったりします。私は特にアルファベットにこの症状が出ていました。

「今まですごく頑張ってきたんだね。」

と、言われた瞬間、ショックを受けるのではなく前向きに捉えることができました。それはきっと、妹をはじめ、今までたくさん知り合った障がいをもつ友達が、様々な困難に立ち向かい、頑張っている姿を見てきたからだと思います。私が、今まで障がいをもつ友達に注いでいた「目」、その目で見て得たものが、私自身の生きる活力になりました。

私の持つこの視機能異常は、現在日本では病気や障がいと認定されていません。しかし、学校にこの話をすると、快く支援に応じてくださり、色つき眼鏡の使用許可、拡大コピーなどあらゆる方法を考えてくださいました。障がいと認定されなかったとしても、私の特性を理解し、支援してくださった先生方の行動こそが、障がい者差別をなくしていく方法の一つではないでしょうか。

まずは、一人一人を尊重すること。そしてその人にできないことがあれば、きちんと理解し、どうすれば手助けできるか考え、行動することだと思います。そうすれば、障がい者の障がいはなくなり、誰もが暮らしやすい世の中になるのではないでしょうか。

私自身が視機能異常であったことで、人から理解をしてもらい、支援の「目」を注いでもらいました。また、障がい者と関わることで、自分が知らなかった世界を見、たくさんのことを学ばせてもらえました。

今年の参議院選挙で、重度の障がい者の方が当選したというニュースを聞きました。このことで、国会ではバリアフリー化が進み、いろいろな対応がされています。今後はどんな方が議員になっても、どんな対応もしてもらいたいものです。一人でも多くの人の人権が守られる世の中になるように、私たち一人一人が社会に「目」を注ぎ続けていきたいです。